

資 料

「クマノザクラ」の教材を事例とした地域教材化のプロセスとポイント

—事前アンケートの分析を活かして—

The points and processes of making the area teaching materials as a case of “KUMANO cherry tree”:
By making use of the analysis of the prior questionnaire

中田 善夫

NAKATA Yoshio

(和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻)

受理日 令和4年9月15日

抄録： 現行の学習指導要領解説小学校社会科において、「地域」という語が重要なキーワードになっている。地域教材化にかかる様々な困難が、学校現場には存在する。教材化にかかる時間と労力の見通しが立てにくいこと、人的な資源の発掘等の情報が把握できない等の現状が大きな要因である。今回大学院生に実施した事前アンケート分析でも、同じ傾向を把握することができた。大学院生の教材化・開発への意欲等の支援・向上を行う目的で、実践例である高池小学校の「クマノザクラ」実践を授業で紹介した。内容は「クマノザクラ」発見から教材化までのプロセスや学習のアウトプット等の取り組みを中心に取上げた。

キーワード： 地域教材化、「クマノザクラ」、アウトプット、情報発信、事前アンケート

1. はじめに

1.1. 地域教材化の重要性について

現行の小学校学習指導要領解説社会編には用語として「社会」が1057件、「思考力」は138件、「表現力」は134件、「判断力」は13件出てくるが、「地域」は862件と「社会」に次いで多い。今回の学習指導要領では「地域」が重要なキーワードとなっている。「地域」が重要視される理由は、地域の持つ特性に基づいて、学習を展開して、児童生徒につけなければならない力を育成するという狙いがあると考えられる。

行田・船越(2020)は「地域から出発する授業を『障子の穴の論理』で語ると分かりやすい」と述べ、「少し離れたところから見れば障子の穴はただの穴でしかない。穴に目を開けて覗くと広い世界が見えてくる。同じように地域は『小さな穴』でしかないが、そこから網の目につながる世界(自然や社会)が見えてくる。」としている(p.368)。

また、文部科学省は「人権教育の指導方法等の在り方について」で「学習教材を選定・開発するに当たっては、学習教材の活用により児童生徒が自ら考えることができるようにするなどの教育効果を高めるため、身近な事柄を取り上げたり、児童生徒の興味・関心等を生かすな

どの創意工夫を行う。」としている。さらに「効果的な教材の例」として「地域の教材化 地域におけるフィールドワークなどとの関連を図りながら、地域の歴史や産業などを採り上げて教材化する。区市町村においては、これに関連する資料等が図書館などに保管されていることも多いので、それらの活用は可能であり、容易であろう。但し、活用に当たっては、児童生徒の実態や発達段階を踏まえ、また、学校がねらいとしている人権課題との関連等の点から検討する。」としている。

このように地域教材は、児童・生徒にとって価値のあるものとされている。しかし、実践を継続し、改善しようとする場合やさらに新しい取り組みを教材化することは、ハードルが高いと言わざるを得ない。

そこで本稿では、地域教材に関して大学院生へのアンケート調査を基に、地域教材の作成経験の有無や苦手意識について明らかにする。正確に把握した上で、地域教材化に関する課題をどう解決していくのか、何に重点をおいて取り組めばいいのかを「クマノザクラ」の教材化を通して明らかにしていきたい。

2. 本研究の目的と方法

本稿では、地域教材化に関する大学院生への事前ア

アンケートを分析し、問題点を明らかにする。またそれらの問題点を解決するために、和歌山県内で教材化された地域素材について、その教材化のプロセス、実践と成果について紹介することを目的とする。

事前アンケートは、著者の授業を受講している現職教員でもある大学院生9名を対象に実施した。アンケート内容は、「地域教材」に関する4つの質問で構成されている。質問内容は以下の通りである。

質問①自分が受けてきた地域に関する学習の中で印象に残っている取り組みは何ですか？その理由も述べてください。

質問②現任校での「地域に関する学習」の現状はどうですか？現状に対してあなたはどのように思っていますか。

質問③自分が学校に赴任して取り組みたい「地域に関する学習」はありますか？その理由も述べてください。

質問④自由記述

3. アンケート結果

3.1. 質問①の結果

大学院生の実際受けてきた地域学習は、具体的な叙述を見てみると、以下のような記述があった。

- ・ 小学校の時は、太鼓学習、地域に根付いた取り組みや緑化センター見学や自然体験活動が充実していた。「のびゆく橋本市」という教材本があり、それに沿って橋本市の文化や歴史、行政などの学習をできた。
- ・ 中学校では、食教育、福祉教育、四季を感じる自然体験や、地域のお年寄りとの温かい交流、根来寺見学など、自然や歴史に触れることで、地域の文化的側面を学ぶなど数値化できない力をつけてもらったと感じたと述べている。
- ・ 総合的な学習の時間での農業体験学習（田植え、茶摘み、茶揉み、文化祭でのお茶の販売、茶工場の見学、山菜採り）地域の人々と関わる機会がたくさんある学習、山間部の過疎地域にある小学校・中学校での学習（農業や特産のお茶作りを体験する）
- ・ 児童生徒数が少ないので、コミュニケーション能力育成の意味でも地域の方との交流は重要で、地域での愛着と自己肯定感もこれらの活動で育まれた。

このように、大学院生の約7割が充実した地域教材学習を体験できたことがわかった。

3.2. 質問②の前半部分：現任校での現状

質問②の現状では、総合的な学習、社会科等の時間を活用して、学年で取り組んでいることがわかった。

具体的な取り組みについては、以下のような記述があった。

- ・ 総合的な学習の時間や社会科を中心に、その他教科を関連させながら、地域の活性化や地域の特産物PR、地産地消を進める取り組みを学習している。また、文化的な取り組みは、俳句教室や田植え体験、わらぐつづくりなどを行い、校長先生が窓口になっていた。
- ・ コロナ禍以前は担任の個人裁量で、地域教材を活用した学習ができていたと感じている。開校年数の浅い学校だが、地域の獅子舞や歴史的価値の高い教材がたくさんある地域にある。
- ・ 低中高で学習内容がほぼ決まって実施していた。総合的な学習の時間や社会科で各学年で福祉や環境、観光、農業などの視点でそれぞれ学習している。
- ・ 「ふるさと学習」の中で、米作りや、川遊び、障害者施設、お年寄りとの交流等を長年続けている。
- ・ 家庭科の保育の授業において、地域の子守唄や鉄砲隊など、地域の文化に触れる内容を扱っている。
- ・ 2年生の町探検、3年生の天神崎生き物学習や地域産業学習、4年生の俳句学習、5年生のナショナルトラスト運動に関する学習、6年生の防災マップ作りや史跡巡り、語り部ジュニア発表、八丈島との交流等、活発な地域に関する学習が地域人材の力を借りてなされていた。
- ・ 総合的な学習の時間である「わかやま創造科」において、地域の「ひと、もの、こと」に関する学習を学年の実態に応じて行っている。校区には県庁や市役所、美術館、図書館、ぶらくり丁商店街、七曲市場など多くの地域教材があり、身近で自分事として捉えやすいと感じている。

このように、それぞれの現任校での地域資源を最大に活かした充実した取り組みが継続して行われていることがわかってきた。

3.3. 質問②の後半部分：現任校の現状に対する意見

具体的には、以下のような記述が見られた。

- ・ 地域社会の一員として自覚が高まり公民的資質の育成につながる。また現実の社会と関わりながら問題解決を図ることができるのが魅力だ。
- ・ 地域の方と関わることを子どもたちが楽しんでいるので、今後も取り組みが進めたい。
- ・ 学校が恵まれた立地にあるので、その環境を存分に生かして学習をさせたい。
- ・ さらに総合的な学習の時間を充実させていきたいので、現状には満足していないが、少しずつ各学年の内容を充実させていきたい。
- ・ 担任の裁量に任せているので総合的な学習の時間

の設定など学校全体での取り組みになるようにしたいが、なかなか進んでいない。

- ・ 子供たちは地域のことを知らないということが多い。そのため、地域学習を通して、自分の地域の良さを知り、それを伝える活動を通して地域に愛着を持たせたい。
- ・ 正直、もったいないという思いが強い。自分自身、地域の教材を学習するにあたり、人に会ったり、調べたりする中で、教材についてより好きになっていった記憶がある。学校全体で取り組めずにいることはもったいない。
- ・ もう少し、地域に関する学習をするべきだ。
- ・ 学習のゴールとして、観光地でガイドをするなどができたらいいなと思っている。校区に大きな観光地がある学校はいいですね。
- ・ 環境問題を抱えている地区などの課題を抱えた校区などで、問題解決に向けて子どもの視点でできることを考えたりしていきたい。
- ・ 積極的に行いたいのが、実務を担う教員が少なく、地域資源を十分に活用できていない。形骸化しているものもあるので、見直しが必要だ。また、職員研修などで、地域の特色を押さえ、教材化を一緒にやっていくような取り組みも大切だ。
- ・ 中学校は、次の高校進学もあり一つの単元に時間をかけすぎると、範囲が追いつかないことが考えられる。
- ・ 取り組みが学校全体としての取り組みになっていない。
- ・ 自然体験的な機会はあるが、その後の探究に繋がっていないことが多い。地理や歴史的なものを扱う活動が少ない。

このように、大学院生は、現任校での取り組みに対して一定の成果と手応えを感じているものの、満足していない現状がわかってきた。特に、「形骸化」や「学校全体の取り組みになっていない」ことを「もったいない」と表現しており、地域教材の価値を認識しつつも、特定の教員や学年の取り組みにとどまっている現状に不満を感じている様子がわかる。また、どんな取り組みにしていけばいいのか具体策を考えている前向きな姿勢がうかがえた。

3.4. 質問③の結果

具体的には、以下のような記述が見られた。

- ・ 地域の音楽の教材化、お囃子の創作
- ・ 地域の歴史学習、地域のPRを通じた学習
- ・ 観光に関わって地域の人や遊びに来てくれた人の役に立つ子供たちの活動をしてみたい。例えば、海の近い学校で海岸清掃や看板づくりなど、学校内の活動にならない取り組みをしてみたい。

- ・ 学習のゴールとして、観光地でガイドをするなどができたらいいなと思う。校区に大きな観光地がある学校もいい。
- ・ 自分史に興味があるが、児童生徒の興味を考えると、60代半ばから70代前半の方々の話が良い。
- ・ 地域の歴史的な文化財の木造建築（構造）や、道具の歴史について
- ・ 観光業・農業・林業等の産業や歴史に興味がある。

このように、大学院生自身が今まで経験したことのない環境で地域学習に取り組みたいという前向きな気持を持っていることがわかった。

3.5. 質問③の理由

質問③の理由については、具体的には、以下のような記述が見られた。

- ・ 地域に伝承される音楽が自分と関わっているという意識が高まったり、日本人としての音楽感覚を高めたりすることができると思う。
- ・ 子供たちは地域のことを知らないということが多いので、地域学習を通して、自分の地域の良さを知り、それを伝える活動を通して地域に愛着を持ってほしい。
- ・ 今まで学校外も巻き込んだ取り組みをやってみたいと思うが、人を招くぐらいの活動しかできていなかったのも、今までできなかったことに挑戦してみたい。
- ・ 自分のふるさとを愛する心を育みたい。
- ・ 自分の専門で、歴史的建造物の構造やそれらに活用された道具があるから。
- ・ 観光業・農業・林業等の産業や歴史に興味がある。
- ・ 海辺の学校に赴任したことがないので、今後もしそういう機会があれば、漁業や水産業に関する地域の学習などもしてみたい。

このように取り組みたい理由には、今までやれなかったことやアウトプットまで見通した地域学習に取り組んでみたいなど、意欲が強く現れていた。特に、子どもに、「地域の良さ」を知ってほしい、「地域への愛着」や「ふるさとを愛する心を育みたい」という記述には、学校がその地域の人材育成を担うという役割への意識が読み取れる。これ以外にも、漁業、林業、観光等に関するものが具体的に示されていた。

3.6. 質問④自由記述

上記の3つの質問以外について、自由に記述してもらった質問④では、具体的には以下のような記述があった。

- ・ 地域の教材化を行っていくにあたってどうすれば協力していただける地域人材を増やすことができ

るのか、一度協力いただいた人材をどう今後につなげていくのかなど、教えていただくと現任校に活かせるのではないかなと思う。

- ・ 地域教材の学習はどんどんやりたい反面、外部とのパイプ作りなど一から始めると膨大な労力がかかる。その分、価値のある取り組みだが継続していない学校では、教科書の指導が中心になり、敬遠される傾向にある。そうならないように今求められることも含めて学びたい。
- ・ 取り立てて、ここ、という故郷を持たない者から見た時、自分の生まれ育った場所、長く住んだ場所に愛着が持てるかどうかは、自己肯定感や、アイデンティティーの獲得と深い関係があると感じている。全員にその機会を生むことができる点において、学校教育の果たす役割は大きい。一方で教材化に当たっては、教員の自覚や相応の準備が必要であるが、若年化多忙化から十分なことができない現状がある。組織力を高めることや、外部人材をうまく活用すること、市町村など大きな枠組みで教材化の研究・連携を進めることが求められていると感じる。
- ・ どうすれば改善できるのか知りたい意欲が強い。
- ・ 現任校は熊野古道や天神崎といった、世界遺産やジオパークに関係する教材があり、地域のみなさんが学校への協力を進んで行ってくださる地域で、地域の教材化が行いやすい学校だ。自分自身も地域に根ざした学習にとっても興味があるので、他校のアイデア等を授業で学びたい。

このように、それぞれ現任校の地域学習に関する実態はさまざまだが、それぞれの学校での課題解決への糸口やヒント、成功事例を学びたいという大学院生のニーズが見えてきた。

このようなニーズを踏まえ、以下に「クマノザクラ」教材化の実際について述べる。本事例は、大学院の授業で紹介し、大学院生の課題解決や地域教材化の理解を深めるために使用したものである。高池小学校の「クマノザクラ」がどのように教材化されたのか、そのプロセスを紹介する。また、この取り組みは、地元の観光協会と連携した取り組みとなっていて、地域連携で実現できた取り組みである。

4. 「クマノザクラ」教材化の実際

「クマノザクラ」の地域教材化に取り組んだ高池小学校は、古座川町に位置し、児童数63名、職員13名の小規模校である。

「クマノザクラ」とは、2018年に新種と判断された日本の紀伊半島南部が原産の日本固有種のサクラで、日本に自生する10種、もしくは11種のサクラ属基本野生種のうちの一つである。最近では「クマノザクラ」の取り組みについて、高池小学校大畑校長に2021年6月8日に2時間程度お話しを伺った。取材して以下の3つの重要なことがわかってきた。

第一に、教材化にじっくりと時間をかけていることである。2017年に「クマノザクラ」が古座川町花に指定された。それから教材とするまで3年をかけていることが、図7からもわかる。

年度	時期	取組内容	備考
2017/H29	2月	クマノザクラが新種として100ぶりに発見される	
	3月	クマノザクラを町の花に指定(※それまではヤマザクラ)	
2018/H30 1年目	10月	5・6年生が樹木医の矢倉寛之さんから、クマノザクラについて説明を受ける	
	12～3月	6年生が卒業制作を兼ねて、保護と周知のために標本木の下に看板を制作し設置	
2019/R1 2年目	10月	標本木の下で、3年生がクマノザクラについて説明を受け、種を蒔く	
	11月	4～6年生が、学校でクマノザクラについて説明を受け、種を蒔く	
	1～2月	6年生が卒業制作を兼ねて、道の駅～標本木までの道案内看板を設置	
	2月	6年生が矢倉さんからクマノザクラガイドの内容等について説明や指導を受ける	
	2月下旬	6年生がクマノザクラの苗を植え替え作業⇒発芽した15本中5本が成長	
	3月中旬	クマノザクラガイドがコロナによる休校で中止に	
	3月春休み中	休校中のため、学校では卒業記念植樹ができず、休みの日に(有志で)記念植樹	
2020/R2 3年目	4月春休み中	年度末にできなかった道案内看板を職員で設置	
	12月初め	標本木の下で、6年生がクマノザクラについて説明を受ける⇒学校で、矢倉さんに教えていただきながら、2度目のクマノザクラの植え替え作業	
	1月下旬	標本木の下で、3年生がクマノザクラについて説明を受け、種を蒔く	
	3月	観光協会提供のユニフォームを着て、クマノザクラガイドデビュー(3.10&3.11)	
	3月	卒業記念植樹	
2021/R3 4年目	5月中旬	標本木の下で、種を捨てる作業⇒中止	
	5月中旬	4年生が20/50本発芽した苗の植え替え作業	
	9～10月	標本木の下で、5・6年生が勝木俊雄先生(森林総合研究所)からクマノザクラについて説明を受ける	
	11月～	5年：クマノザクラ新聞作り・6年：クマノザクラの魅力紹介のパンフレット作り	
	1月～	6年生、クマノザクラガイドの準備&練習	
	1月下旬	標本木の下で、3年生がクマノザクラについて説明を受け、種を蒔く	
	3月中旬	クマノザクラガイド2年目	

図7 高池小学校の「クマノザクラ」の学習の歴史

第二に、関係機関との連携である。古座川町地域振興課、古座川町観光協会、樹木医との連携をとりながらの教材化であった。

第三に、「アウトプット」を重視している点であった。通常、地域のゲストティーチャーをお迎えして話を聞き、まとめるという学習の形が地域学習の定番の学習の形である。しかし、高池小学校の取り組みは、情報発信というアウトプットまで見通した取り組みであることが特徴である。高池小学校の目標の教育目標「豊かな心をもち、自ら進んで取り組むことのできる子どもの育成」と研究課題「考える力・伝える力の向上をめざして一言語活動の充実を中心に」にある育てたい児童の姿を「クマノザクラ」ガイドの役割を果たす姿で具現化している。

そして、アウトプットとして、6年生児童全員が、「クマノザクラ」の語り部として、地域の方や保護者の方に話ることができるようになっていく。学習したことを自分の知識として身につけ、発信できるようになることで、「伝える力の向上」という目標に到達している。児童の語り部を聞いた地域の方や保護者の方々は、児童の躍動する姿に大変喜ばれていたそうである。

6年生の「クマノザクラ」語り部の取り組みだけではなく、他の学年でもパンフレットにまとめたり、紙芝居を作成し、披露するなど、様々なアウトプットの活動も実施していた。そのことで、児童の自己有用感、自己肯定感が向上し、様々な学校での活動にも前向きに取り組めるようになったという。保護者や地域の方々に大変喜んでもらえ、褒めて頂けたことが大きいと大畑校長は話している。

さらに、これらの学校の取り組みは、学校だけで紹介するだけではなく、古座川町公民館だより「こざがわ」にも記事として紹介され、広く情報発信されている。地方新聞である紀南新聞や熊野新聞にも、その

取り組みが紹介された。さらに、テレビ和歌山の夕方の報道番組のイブニングアイやNHK 和歌山放送では動画でも取り組みが紹介され、児童、保護者、地域の方々に大変喜ばれた。これも高池小学校の取り組みが他地域へ広報される大きなものとなった。

また、教材化するにあたっては、必要な時間をかけ、学校のカリキュラム作成を行いながら取り組んでいた。高学年だけの取り組みにならないよう、発達段階に応じて、「クマノザクラ」にふれる体験を学校全体で取り組めるようにカリキュラムを設定していた。

古座川町の重点政策に「ふるさと教育」があり、高池小学校でも、学校運営協議会での学校運営方針の承認を得て、ふるさと教育を推進している。そのため、家庭・地域には、学校だより、学校ウェブサイト、会議等を活用して、ふるさと教育の取り組みを周知している。保護者には、各家庭でのクマノザクラガイドのサポート、応援、ガイドを聞きに行く等の協力体制が確立されていた。また、地域では学校運営協議会のメンバーを中心に、古座川町役場、観光協会等との連携がとれていた。特に観光協会のウェブサイトには、児童のクマノザクラガイド開催の日程等の告知案内も掲載されている。また、運用面での費用の協力も得たり、古座川町公民館の方々の運営協力を得られている。このように学校・家庭・地域の三位一体でのふるさと教育に取り組んでいるのが大きな特徴である。

この高池小学校における三位一体の取り組みの成果は、令和2年2月に発行された、きのくにコミュニティスクール推進協議会の「令和元年度 きのくにコミュニティスクールヒント集」でも紹介されている。

その中で取り組みの成果として「学校内では学ぶこ

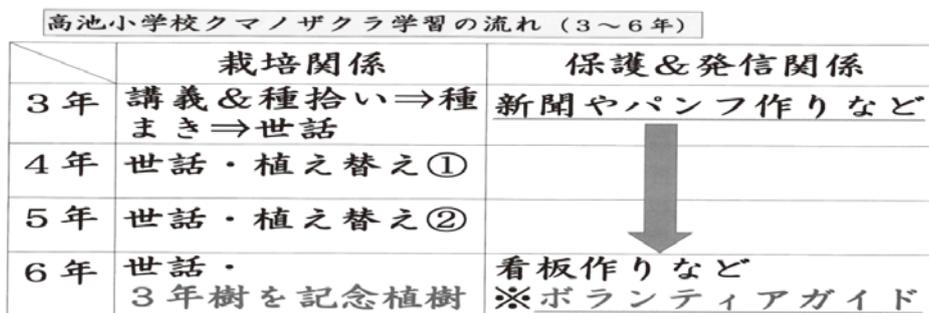


図8 高池小学校「クマノザクラ」学習の流れ

とのできない学びにつなげることができた。児童からは地域に対する課題意識をもって取り組む姿勢が見受けられた。」と書かれている。学校だけで教材化するのは難しいが、学校運営協議会を中心として関係機関と連携していけば、よりスムーズに地域教材化の道も開かれる事例であった。



図 11 熊野新聞で紹介されたガイドの写真

5. おわりに

事前アンケートの分析で述べたように、大学院生は、現任校での取り組みを冷静に把握していた。地域学習の重要性や取り組むことの利点についても授業前に既に認識していることが分かった。しかし、現状には満足できていない気持ちを持っていることも明らかとなった。「形骸化」「学校全体の取り組みになっていない」「特定の教員や学年の取り組みにとどまっている現状」に不満を感じていた。

事前アンケートの結果を受けて、授業では、具体的な実践例の「クマノザクラ」教材化を紹介した。取り組みのメリットは十分、分かっているが、デメリットの解決には「何から手をつけたらいいのかわからない」という院生の課題を改善するヒントとなることをねらった。

この「クマノザクラ」の実践は、遠い昔の実践記録ではなく、令和になってからの取り組みである。取り組みを学ぶことで自校でも十分に同様な実践ができる内容である。「クマノザクラ」教材化の取り組みを知ることによって、それだったら、自分も挑戦できるかもしれないと取り組む意欲が上がっていくことを期待した。また地域教材化は、必ずしもゼロからの取り組みである必要はなく、現任校の状況を把握し、現有するものを継続し、少しずつ改善することから始めればよいと考える。

「クマノザクラ」教材化は、子供たちを発信者にするところまでをデザインしているところが重要なポイントである。また、学校全体の取り組みとするためには、きめ細やかな配慮の下で進めることや教材化までの期間3年をかけていることなどが具体的なヒントとなっ

たのではないだろうか。

「クマノザクラ」地域教材化の実践例に触れることで、自分で今やれることを考え、行動する、フィールドワークや地域に出かけて、現任校の地域資源を知ることの重要性に気づき、「やれそうだし楽しそうだし」と地域教材に対する意識が前向きに変わった大学院生が出てきたことが、授業後の振り返りシートからもわかった。今回の授業後、大学院生2名が、現任校での地域フィールドワークに実際に出かけ、新たな地域教材を発掘できたことを嬉しそうに報告してくれた。授業がきっかけになって教材発掘しようとする意欲が高まり行動してくれたことはとても嬉しい出来事だった。

地域教材化の実現には、教師自らが地域に出かけ、地域を自分の目で確かめ、地域の方々との情報交換等のコミュニケーションを行うことによって初めて実現できるものである。教師一人ではなく、人的ネットワーク、例えば、保護者、学校運営協議会等でのネットワークを広げるなど、慌てず、急がず、できる所から行動していくことが大事である。

今や地域と共にある学校へと「同じベクトル（方向）」を向いて一緒に活動するコミュニティスクールとして学校が変わった。ますます地域人材とのパイプをより太くしていくことが地域社会を中心とした学びの充実には欠かせない。

令和3年6月28日発刊の読売新聞朝刊には授業時数の記事の中で教材化にける時数の減少、予算がより厳しくなる見通しが出ていた。

しかし、地域社会を中心とした学びは児童生徒にとって価値ある取り組みであり、メリット・デメリットの検証を行いながら継続する価値のある取り組みである。もし、現任校に地域教材の実践がなければ、高池小学校の事例のように学校全体で何年かかけて教材開発に時間をかけて取り組んでいく。その際には、取り組みの公開、情報発信等アウトプットまで見通したカリキュラムデザインにしアウトプットを児童生徒が担当するような工夫を入れる。

大畑校長が一番懸念しているのが、職員が変わってもクマノザクラガイドの取り組みが継続していくことである。その手立てとして、地域、保護者、関係者との連携をさらに強めるようにしている。具体的には、高池小学校の学校運営協議会のメンバーにクマノザクラガイド関係者がいて、学校と共にクマノザクラガイドの取り組みが継続できる環境づくりを整えようとしている。このように学校運営協議会を中心として、教員の異動があっても、クマノザクラガイドが継続できる仕組みの構築に取り組んでいる。ぜひ、その地域連携による地域教材化の事例として「クマノザクラ」の実践を参考にしてほしい。

6 参考資料・引用資料

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編 平成29年7月
- ・行田稔彦・船越 勝編著(2020年)『今だからこそ「子ども発」の学びを：バーチャルからリアルに』新評論社
- ・令和元年度 きのくにコミュニティスクールヒント集(2020年) きのくにコミュニティスクール推進協議会
- ・野木勝弘・初澤敏生(2021) 未来の創り手を育てる小学校社会科の授業、福島大学地域創造 第32巻第2号 P25-35
- ・山神達也(2020) 地域教材の開発と活用「歴史・地理探訪フィールドワーク」熊野の果てまでイッテQ 入り口編、令和2年度和歌山大学 共同研究事業成果報告書 P217-221
- ・山田 均(2016) 社会科指導における地域の教材化～内面的なやる気の育成に視点を当てて、奈良学園大学人間教育学研究第4号、P87-95
- ・ちかばめぐり(2020) 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 Kii-Plus・和歌山市
- ・文部科学省 中央教育審議会(諮問) 新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方について(2016年)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1363628.htm (参照日 2021.6.2)
- ・古座川町立高池小学校ホームページ
<http://www.za.ztv.ne.jp/takaike-sho/> (参照日 2021.6.2)
- ・古座川町観光協会ホームページ
<https://kozagawakanko.jp/kumanozakura/> (参照日 2021.6.2)
- ・文部科学省 学校と地域でつくる学びの未来(2021)
<https://manabi-mirai.mext.go.jp/index.html> (参照日 2021.6.2)
- ・NITS 独立行政法人教職員支援機構 「地域に開かれた学校」から「地域とともにある学校」へ：校内研修シリーズ No.24(2018) 文部科学省初等中等教育局参事官 木村直人
<https://www.youtube.com/watch?v=Ew9Rbw8RcjE&t=921s> (参照日 2021.6.2)

